

お 名 前	性 別	終戦時の年齢	現 住 所
あがた としお 安形 俊夫	男 性	17 歳	富岡中部

「海軍工廠から予科練へ」

○ 動員学徒として海軍工廠へ

昭和19年4月、私は豊橋第二中学校（現在の豊橋東高校）の4年生でしたが、学徒動員で豊川海軍工廠へ行くことになりました。西門近くにある第4機銃工場で20ミリ機関砲の銃身を作りました。銃身の内側をヤスリで削るのが仕事でした。学徒に対しては、仕事上ではそれほど厳しかったという覚えはありません。

1週間に1回帰宅できたので、それが救いでした。家には田畑があるので、配給制度が始まっても食べるものはありました。大豆を煎って寮の同じ部屋の仲間にお土産に持っていくととても喜ばれました。

しばらくして、私は予科練を受けることにしました。飛行機に乗りたい気持ちが強かったですが、工廠での生活を逃れたいという思いもありました。当時の予科練は、入隊するのもそれほど難しくはありませんでした。しかし、両親に止められるのではないかと気がかりでした。私は6人姉弟で、3人の姉と弟が二人いました。長男ですから、当然家を継いでほしいと思っているに違いありません。私の考えを伝えると、意外にも父も母も反対しませんでした。その当時、母親は国防婦人会の会長を任され、お国のために尽くそうと地域の人たちをリードする立場でした。恐らく、世間体もあって止められなかったのだと思います。家の周りには召集されたり戦死されたりした家が多くなっていました。自分の家は平穏でしたので、肩身が狭い思いをしていたかもしれないからです。長男の自分が志願することはそれなりの意味があるのです。

しかし、予科練といえば聞こえはいいですが、やがて特攻隊が編成されることになるわけですから、心の中では引き留めたかったに違いありません。生きて帰るとは、だれも思っていなかったですから。

予科練とは

海軍飛行予科練習生のこと。海軍は1930年、小学校高等科卒業生を対象に、3年で飛行搭乗員を養成する予科練習生を採用し、その後、飛行予科練習生と改めた。さらに37年、中等学校4年修了者を1年半の課程で養成する甲種飛行予科練習生制度を新設し、従来の飛行予科練習生を乙種とした。これらを予科練という。

戦況の悪化後、大量採用に伴って全国19カ所で予科練教育がされた。45年になると教育は中止され、多くが本土防衛のための特攻要員や整備兵として送り出された。終戦までの15年間に約24万人が入隊し、約1万9千人が戦死したとされる。

私は19年8月末に退廠し、予科練へ入ることになりました。同級生は、陸軍や海軍に志願したり、そのまま海軍工廠に留まったりしました。海軍工廠への爆撃で亡くなった人も何人かいました。進路を決めることは運命を決めることにもなるのです。

○ 予科練での体験

入隊する時は、赤紙での出兵と同じように日章旗への寄せ書きと千人針を用意してくれました。予科練に入隊したのは昭和19年9月15日のことです。滋賀海軍航空隊甲種飛行予科練習生が正式名称です。私はその第15期（16期で終了）で、32分隊の第8班でした。1班が40名編成で、8班までの320名が一つの兵舎に入りました。最初の1週間は、泣きの涙で過ごしました。大変な所に来てしまった、もう生きて帰れない、刑務所と同じだと思いました。



昭和20年3月偵察分隊の写真

予科練の一日

滋賀海軍飛行隊の寝室は、二段ベッドの寝台でした。朝、起床ラッパがなりますと、1分で兵舎の前へ整列をしなければなりません。それも毛布をきちんとたたみ、靴下をはき、身支度を調べて整列です。班長がチェックします。毛布の端が少しでもずれているとはねのけられます。私は、寝る前に靴下をはき、起床時間前に起きて準備をしていました。ラッパと同時に飛び起きて、毛布と身支度です。訓練はすごいですね。できるはずもないことができるようになるんです。慣れてくると、本当に1分でそれができるようになるのです。

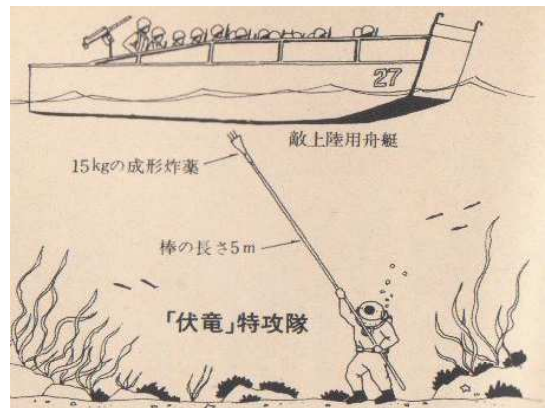
予科練の1年半は基礎訓練にあてられていました。午前中は中学校の先生が派遣され、数学や化学、英語などの教科、無線通信などを勉強し、午後は手旗信号やカッター訓練などでした。当時は英語は使用しないように排斥されていましたが、予科練や海軍兵学校ではきちんと学んでいました。敵国の理解のためには、英語は逆に身につける必要があると考えられてのことだったと思います。カッター訓練は体力的に大変で、体がへトへトになりました。競争で負けると夕食を半分にされたりするので必死でした。勉強も厳しく、1週間に1回テストがあり、成績が悪いと班の連帯責任で、バッテリー（精神注入棒）を受けるか、パンチ1発、腕立て伏せのいずれかの罰がありました。腕立て伏せはいつまでもやらされるので、1回の苦痛ですむバッテリーかパンチの方がよいと思っていました。

特攻隊のこと

予科練といえば特攻隊を連想しますが、不思議と「天皇陛下のために」とか「お

国のために」といった意識はありませんでした。精神講話でもその教えはありませんでした。それは意外なことでした。

それでも19年の終わりぐらいになると、先輩だけでなく、15期にも夜中に全員集合がありました。そこで名前が呼ばれた人は、朝いなくなります。特攻隊として召集されるのです。私たちは飛行訓練は受けていませんので、「伏龍」などの特攻隊の訓練を受けるのです。上陸する船を阻止するためですが、今考えれば全く無謀な作戦で、竹槍訓練と同じです。潜水服を着て棒の先に爆雷をつけて上陸用船艇の底に当てて爆破するというのです。実際にはその作戦は実行できませんでした。その潜水訓練中に亡くなった人が何人かいたようです。予科練の若い命が何と粗末に扱われ、多くの悲劇を生んだことか。



「伏龍」とは 潜水服・ボンベを装着した隊員が、10人で一隊を編成し、長さ2m, 5mの棒の先についた機雷で上陸用船艇を突き爆破するという特攻戦法。人間機雷とも呼ばれる。

3月頃には、その訓練もなくなり、飛行場づくりなどの作業が多くなり、各地に派遣されました。日本各地で空襲が激しくなってきた、勉強や訓練どころではなくなってきたということだったと思います。

私は京都の亀岡に行きました。亀岡へは、両親が訪ねてきてくれました。年に1回来てもらえる日があったのです。その日はちょうど豊橋空襲があった日で、両親が来る時は何事ありませんでしたが、帰りは豊橋が焼け野原になっていたと聞きました。ですから昭和20年6月20日だったと記憶しています。

そして多賀で終戦を迎えました。

○ 予科練で学んだこと

私は、今になって思えば、予科練の体験があったからこそ人としての基礎が鍛えられたと感じています。例えば月に1, 2回、外出することが許されていました。大津の三井寺などへ行きました。その時、厳しくチェックされるのが身だしなみです。靴はピカピカに磨き服にはブラシをかけてしわがないようにし、頭髪や帽子も点検されます。もちろんだらしなかつたら外出禁止になります。他にも、整理整頓、「ハイ」という返事など、しっかり身につけさせられました。これは今の教育にも通じるものですから、教員となった私にとっては後に役立つことになり、予科練での訓練には感謝しています。

予科練は軍隊ですから、日常的に制裁や暴力があったように思われますが、実は「なぐってはいけない」という規則があったようです。それを裏づけるエピソードがあります。他の分隊の班長が班員を並ばせてなぐっている時に若い将校が

自転車で通りかかり、しばらく様子を見ていました。そのうちになぐっている班長に近づき、何やら言葉を掛けていましたが、班長を同じようになぐったのです。度を過ぎた暴力、むやみになぐってはいけないということを教えたのだと思います。

厳しい訓練が続き、精神的にも肉体的にも耐えきれなくなった仲間もいました。とても悲しいことですが、15期の同期で自殺した人が3名いました。私と同じ分隊ではありませんでしたが、一人は引き込み線の鉄道へ飛び込み、一人は配給された切り出しナイフで自殺しました。もう一人はよく覚えていません。連帯責任がともなう訓練を続けると、仲間と協力し合い、助け合い、励まし合って苦労を共にすることになります。それだけに仲間との絆がとても強くなります。それだけに自殺という形で仲間を失うことほど辛いことはありません。予科練へ志願して入隊したのに、志を遂げることなく命を絶つということは、本人もさぞ無念だったことと思います。



昭20.8.18 多賀神社にて

終戦後、予科練の戦友とは15期会で毎年のように集まっては旧交をあたためていました。10年ぐらい前に全体での開催はできなくなりました。戦後73年が経ち、お互いに高齢となって仲間が次第に減ってきていますが、元気な仲間とは今も交流が続いています。その当時の苦労を共にした友との絆は、私にとって大切な宝になっています。

<参考>		滋賀海軍航空隊の略史	HP：滋賀海軍航空隊より
昭19年	6月 1日	三重海軍航空隊の滋賀分遣隊として発足	
昭19年	8月 1日	甲飛14期 約2,000名、奈良分遣隊から転隊	
昭19年	8月15日	三重海軍航空隊より独立し滋賀海軍航空隊となる	
昭19年	9月 3日	甲飛13期（後期）の一部 第一次水中特攻隊に転隊	
昭19年	10月 日	甲飛13期（後期）の一部、第一特別基地隊へ入隊（回天）	
昭19年	10月 1日	甲飛15期 約3,000名入隊	
昭20年	3月 日	甲飛13期（後期）の一部、柳井潜水学校へ入校（水中特攻）	
昭20年	3月26日	甲飛13期（後期）の一部 第2次水中特攻隊に転隊 甲飛14期の約200名 水中特攻隊に転隊	
昭20年	4月 1日	甲飛16期 約1,000名入隊	
昭20年	4月24日	14期練習生の約300名 水中特攻隊に転隊	
昭20年	6月 1日	飛行専修15期予備学生 砲術学校館山分校に転出	
昭20年	6月15日	甲飛13期の一部 航空特攻伊吹部隊に転隊	
昭20年	6月20日	飛行専修2期予備生徒 砲術学校館山分校に転出	
昭20年	6月 日	甲飛14期の一部 野辺山秋水特攻部隊に転隊	
昭20年	8月15日	終戦	